

優秀賞

不誠実は心にとげが刺さる

新居浜市立西中学校 3年 川瀬 梨紗

「あの子が最初にしようとしたもん。」

母が電話をしている最中、私が泣きながら伝えた言葉です。当時九歳。実際その時の私は、シヨックが強く、ほんやりとしか自分の失敗を覚えていないのでした。今となつては、後悔の念しかないのにも関わらず。私には、小学生のころから特に仲の良い友人がいます。九歳、小学三年生の時も、いつも三人で一緒にいました。私たちは家が近かったこともありよく遊んでいたのですが、各々の家に帰って着替えを済ませると、すぐに誰かの家に集まり、宿題をして、それからおしゃべりをしたりごっこ遊びをしたりして、楽しんでいました。

そんなある日、「早く遊びたい」という気持ちからでしょう、一番早く終わった友人の回答を写そうと、どちらからともなく言い出しました。その時、全く悪びれもなくいたのを悔やんでいます。少しして、友人の母がその幼い悪だくみを発見し、私たちは結局自分たちの力で解くことになりました。

家に帰って、一本の電話が入りました。母がとると、その友人の家からでした。昼間の出来事の件についてです。私はその夜、目が腫れるまで泣いていました。「友情を壊すことにもつながるんだよ。そういう下種いことはやめなさい。」という母の言葉が頭から離れませんでした。口をついて出た「あの子が」を、友人も言っていたのです。私は、パニックでもう何も考えられませんでした。違うことを言っているのは私か、彼女か。意見の食い違いは、とても恐ろしいものでした。私が失敗を経て学んだのは「誠実」です。不誠実でいれば、何か大切なものが、今まで築きあげてきたものがいとも簡単に壊れてしまう場合があることを知りました。現に、今ではもう何事もなかったようにお互いに過ごしていますが、私の中で母の言葉は今もずっと残っています。誠実は誰も苦しみません。自分の心も、他人の心も、誰の心も。